

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26590130

研究課題名(和文) 愛着の内的作業モデルの潜在的側面

研究課題名(英文) Implicit aspects of internal working model in attachment

研究代表者

上淵 寿 (Uebuchi, Hisashi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：20292998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主たる目的は、愛着(アタッチメント)の内的作業モデルを厳密に測定することである。この種の研究は、世界でも数例しかない。また、先行研究の抱える問題を克服する試みを行った。

本研究の最大の意義は、本来無意識的とされる、愛着の内的作業モデルの自動的な働きを測定することである。現在使用されている愛着の内的作業モデルの指標の多くは、質問紙等の顕在的な指標であり、愛着の内的作業モデルの潜在的な本質を測定できているとは言い難い。ゆえに、潜在的態度を測定する方法を利用して、内的作業モデルの潜在的、自動処理部分を測定した。

研究成果の概要(英文)：This study's main purpose was to measure internal working model in attachment exactly. This kind of studies were few in the world. Then, some problems were solved which previous researches had.

This study's most significance was to measure automatic activities of internal working model in attachment. In present, many indices of internal working model having used were explicit measures (e.g., questionnaires). Those could not measure implicit natures of internal working model. So, using method of measuring implicit attitudes, implicit and automatic aspects of internal working model were measured.

研究分野：教育心理学，発達心理学，社会心理学

キーワード：愛着 内的作業モデル 潜在性

1. 研究開始当初の背景

愛着の内的作業モデル (Internal Working model: IWM) とは、子どもが主要な愛着対象との間で経験した相互作用を通して構築する、自己の周りの世界や、愛着対象または自己に関する心的な表象モデルである (Bowlby, 1973)。坂上 (2005) は、一旦作られた愛着の内的作業モデルは、多くの場合に無意識的かつ自動的に働くため、意識的にそれを点検して作り変えたり修正したりすることが難しいと述べている。

しかし、現在使われている愛着の IWM を測定する指標の多くは、質問紙調査などの顕在的な指標を使用しており、本来無意識的な要素が多くあるはずの愛着の作業モデルを測定できない。

愛着の IWM を測る潜在的な指標を使用した数少ない。本研究では、潜在的指標として、Go/No-go Association Task (GNAT; Nosek & Banaji, 2001) を使用した。GNAT は、単一概念の潜在的測度を測定するツールとして開発されたものである。愛着の IWM の測定に GNAT を使用することで、無意識的で自動的な潜在表象モデルとしての愛着の IWM を測定することができると考えられた。

一方、従来の愛着研究で用いられてきた質問紙は、GNAT で測定する潜在的・自動的な IWM に対して、IWM の顕在的・意識的な部分を測定していると考えられる事ができた。

2. 研究の目的

(1) GNAT による愛着の潜在的・自動的側面の測定方法の開発。

(2) 顕在的 IWM と潜在的 IWM の影響する情報処理の違いを明らかにすること。

3. 研究の方法

(1) GNAT で使用する単語の収集と選択

目的：質問紙調査を実施し、関係不安を測定する GNAT (以下、関係不安 GNAT) 及び親密性回避を測定する GNAT (以下、親密性回避 GNAT) で使用する刺激語を選定。

方法

・参加者 大学生および大学院生 60 名程度
・材料 GNAT で調べたい関係不安 (自分が愛されるか否か) と親密性回避 (他者は信頼できるか否か) に沿って、類語辞典等を参考にし、それぞれのカテゴリー (安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型) に属すると予想される 20 語を選定する。さらに、自己と他者それぞれに関わる単語としては、藤井・上淵 (2010) の自尊心 IAT の刺激語を使用。

これらの刺激語をまとめて、1 つの質問紙に印刷する。

・手続 参加者には個別に実験室に入ってもらい、質問紙への回答を依頼する。各単語が、自己が愛されるか否かにどの程度関連するか、他者が信頼できるか否かとどの程度関連するかを、自己あるいは他者とどの程度関連するかを、7 件法で回答を求める。

結果の分析：参加者の回答から、特に得点の高かった 5 語をそれぞれのカテゴリーから選択し、これを GNAT の刺激語として使用することとした。

(2) ポジティブ語、ネガティブ語の収集と選択

目的：研究 (3) で使用するポジティブ語とネガティブ語を収集し、実際に実験で使用する語を選択することである。

参加者 大学生および大学院生 60 名程度。
材料 既存の複数の感情尺度から 200 語程度の単語を選び、1 冊の質問紙にまとめた。

手続 参加者に個別に面接をして、各単語についてポジティブかネガティブかを 5 件法で尋ねた。

(3) IWM の GNAT を作成し、ポジティブ、ネガティブ語との関係を検討することである。

目的：研究 (1) で選んだ刺激語を使用して IWM の GNAT (関係不安 GNAT と親密性回避 GNAT) を作成した。これらの測度が語彙判断課題の成績を予測するかを検討した。

参加者 大学生および大学院生 60 名。

材料 (1) で選んだ刺激語 20 語 (4 つのカテゴリーの各々につき 5 語)。刺激語等の GNAT を実施するためのプログラム

(Inquisit Ver.4 にて作成)。PC。語彙判断課題 (研究 (2) で選択した、ポジティブ語 20 語、ネガティブ語 20 語)。IWM の顕在的側面を測るために、一般他者を対象とした愛着スタイル尺度 (ECR-GO: 中尾・加藤, 2004) を使用。

手続

ア 実験に先立って ECR-GO を参加者に回答させた。

イ GNAT の実施 実験参加者に PC の画面をみせる。中央に現れる単語が、画面の左右の端に現れる単語のどちらか一方と関係あると考えれば、キーを押し、関係ないと反すれば押さないように教示をし、以下、関係不安と親密性の回避について、それぞれ上記の試行を繰り返した。

ウ 語彙判断課題の実施 実験参加者に PC の画面をみせる。画面に現れる単語が有意味語か無意味語かを判断し、それぞれに対応するキーを押すように教示をし、実行させた。

語彙判断課題では、閾上または閾下でプライム (ポジティブ語あるいはネガティブ語) を提示し、その後、自己または他者に関する単語あるいは無意味な単語を提示した。そして、正反応の反応時間を測定した。

4. 研究成果

(1) 本研究では、従来から使用されていた質問紙を用いて顕在的に測定した IWM の他に、二つの GNAT を用いて潜在的 IWM を測定し、それらが情報処理に及ぼす影響を検討した。また、プライム提示の提示水準により、潜在的・顕在的 IWM と語彙判断課題の刺激語の反応時間との関連に違いが見られるかについても検討した。その結果、潜在的関係不安と

親密性回避は、闕下プライム群における語彙判断課題の反応時間と関連がみられ、無意識下での情報処理に一定の影響を及ぼすことが示された。

(2) 顕在的・潜在的 IWM の下位指標間の関連
顕在的・潜在的 IWM の相関は有意ではなかった。これらの測度間に有意な相関がないことは、顕在的・潜在的測度の測定対象が異なることを示唆するものであり、一方の測度を否定するものではない(潮村, 2008)。ただし、新たに作成した各測度が一定の予測力を持たない限り、その妥当性を論じること不可可能である。ゆえに本研究では、情報処理との関連を併せて検討した。

(3) 親密性回避による情報処理への影響
他者関連語プライム条件では、闕下プライム群で潜在的親密性回避が高いと、愛着関連ネガティブ語に対する反応が促進されていた。この点は予測の範疇に収まるものであった。先行研究では、親密性回避は愛着に関連する情報処理に対して抑制的に働き、それが高い場合、愛着関連の情報への意識的なアクセスが困難になるとされてきた(Shaver & Mikulincer, 2007)。それに対して本研究の結果は、潜在的な親密性回避傾向が、無意識的なレベルでの情報処理に寄与していることを実証するものである。“他者”に関する語のプライムにより、他者へのネガティブな表象が無意識下で活性化された結果、他者との脅威的な場面を回避する情報処理機能が働き、愛着に関するネガティブな語への反応が促進されたのではないかと考えられる。

一方で、自己関連語プライム条件では、潜在的親密性回避の高さは愛着関連のポジティブ語の反応時間を遅らせていた。この結果は仮説とは関連しないが重要なことを示している可能性がある。

“自己”に関する語をプライムされた際、後続のポジティブな情報のアクセス可能性が低まったといえるため、潜在的親密性回避は、無意識下で自己とポジティブな情報の結びつきを抑制する働きをもつ可能性がある。親密性回避の高い者は、他者に対する信頼の低さから、愛着的行動や他者との親密な関わり合いを避ける傾向がある(Batholomew, 1990)。ゆえに、他者と協力して活動したり、他者を尊敬したりするなどのポジティブな経験も少ないことが予想される。それゆえ、“自己”と、他者とのポジティブな情緒的な交流を結びつけにくく、“自己”をプライムされた際、ポジティブ情報へのアクセスが抑制されたのかもしれない。ただし、これは一解釈に過ぎず、さらなる知見の蓄積が必要である。

また、顕在的親密性回避は、闕上・闕下プライム群ともに語彙判断課題における反応時間を予測しなかった。親密性回避は、無意識的に愛着に関する情報を意識から排除するという特徴をもつことから、顕在的指標では本来の親密性回避を測定できていない可

能性がある。島(2011)でも顕在的親密性回避の影響は確認されず、親密性回避については特に、潜在的測度が有用である可能性がある。

ただし、顕在的に測定した親密性回避の係数は.65と高くはない。たとえば中尾・加藤(2004)では.83という値が得られているが、この違いがもたらされた要因として、従来は7件法を用いる尺度を5件法で実施した点が考えられる。すなわち、選択肢を狭めたことによって分散が小さくなり、結果として係数が低くなった可能性がある。ゆえに、先行研究と同様に顕在的親密性回避を測定できなかった可能性に加え、相関の希薄化が生じた可能性を排除できず、この結果の解釈には注意が必要である。

(4) 関係不安による情報処理への影響
闕下プライム群において、潜在的関係不安が高いと、自己に関する語がプライムされた際、愛着関連のネガティブ語の反応時間が遅くなった。この点は仮説2とは逆である。先行研究では、関係不安は愛着に関連するネガティブな情報へのアクセス可能性を高めると言われてきた(Shaver & Mikulincer, 2007)。しかし、本研究でGNATを用いて測定された潜在的関係不安は、“自己”に関する語が闕下でプライムされた際に、ネガティブ情報へのアクセス可能性を低めていたといえる。

このような結果が示された理由として、関係不安は意識的・統制的な情報処理をベースにすることから、意識的にネガティブな情報に固執するというその特徴(Shaver & Mikulincer, 2007)を補うために、一種の防衛機制として、無意識下においてネガティブな情報へのアクセスを抑制している可能性が考えられる。ゆえに、無意識下において“自己”に関する語がプライムされた際、ネガティブ語への反応が遅れたと解釈することもできる。ただし、本研究のデータのみでこの予測を裏付けることはできず、更なる検討が必要である。

また、顕在的関係不安は、闕上・闕下プライム群ともに、語彙判断課題の反応時間を予測しなかった。潜在的な情報処理過程を扱う研究では、潜在的・顕在的指標は、それぞれ関連する対象が異なるという研究が多い(相川・藤井, 2011; 大月他, 2008)。特に、潜在的指標は非意識的行動との関連が強いことが報告されており、顕在的関係不安よりも潜在的関係不安の方が、プライミング課題への反応時間という認知的指標と関連しやすかった可能性がある。後述するが、測定方法の類似性という観点からの代替説明も排除できないため、今後の精査を要する。

加えて、親密性回避と同様に、本研究における顕在的親密性回避の係数は.70であり、中尾・加藤(2004)で報告されている.90という値と比して低かった。それゆえ、親密性回避についての結果と同様に、先行研究と同

様に顕在的な関係不安を測定できなかった可能性に加え、相関の希薄化が生じた可能性が残されている。

(5) 闘上・闘下プライム群間の結果の不一致

闘上プライム群では、顕在的・潜在的 IWM ともに、語彙判断課題の反応時間との関連がみられなかった。この点は仮説 1, 2 について予想されていた点を間接的に支持するものといえる。闘上プライム群において IWM による予測ができなかった原因として、闘上プライム群では“自己”や“他者”に関する語が意識下でプライムされたことが考えられる。IWM は自動的・無意識的に働くものであり(遠藤, 1992; 坂上, 2005)、情報処理機能に関して、無意識下での情報処理とのみ関連する可能性がある。

しかし、意識下でネガティブな情報に固執する(Shaver & Mikulincer, 2007) という関係不安の特徴を踏まえると、闘上プライム群において関係不安が情報処理と関連しないという結果は、理論から導かれる予測と矛盾している。この点に関しては引き続き精査が必要だろう。

また、今回の結果は測定方法の類似性による影響が指摘されうる。潜在的な愛着の IWM は GNAT という潜在的な手法すなわち無意識的レベルでの反応によって測定され、同様に反応時間すなわち無意識レベルでの反応を指標とする語彙判断課題の結果を予測したという可能性がある。この代替説明を排除するためには、GNAT で測定した愛着の IWM が、反応時間に依らない指標に対して理論的に一致する予測力を持つ必要がある。例えば、インタビューなどの質的な調査を用いて得られたデータとの関連を検討するといった方法も一考に値すると思われる。

(6) 本研究の課題 本研究には、潜在的 IWM と情報処理機能の関連を扱う知見の少なさによる十分な解釈の不足という課題が残されている。本研究で得られた結果は、従来の顕在的 IWM と情報処理機能の関連を扱う知見と矛盾する部分もあり、推測の域を出ない解釈もある。

ただし、潜在的 IWM が無意識下での情報処理機能を説明する可能性を示し、IWM を扱う研究に新たな視点を提供した点で本研究の意義は大きいと考えられる。本研究で提案したような潜在レベルでの IWM の測度を用いた研究が蓄積することで、より精緻な検討が可能である。今後も顕在・潜在の両側面から IWM を測定し、その影響を検討する研究の蓄積が重要であると考えられる。

そして、IWM を自己報告で顕在的に測定する立場と、潜在的に測定しようとする AAI は、立場が異なる大きな二つの流れであったといえる。本研究で作成された関係不安および親密性回避 GNAT は、自己および他者のカテゴリを使用することから、一般他者を想定する自己報告式の尺度との立場を共有しつつ

も、潜在的な測定を試みるという点で AAI と共通する点がある。本研究の結果は多くの課題を残しているが、本研究を機に知見が蓄積されることで、成人を扱う愛着研究の、これまでの 2 つの流れを繋ぎ得るかもしれない。その意味で、本研究は探索的な試みではあるが、一定の価値を有すると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

藤井勉・上淵寿・山田琴乃・斎藤将大・伊藤恵里子・利根川明子・上淵真理江 (2015). 潜在的な愛着の内的作業モデルと情報処理の関連 - GNAT を用いて - 心理学研究, 86, 132-141. <http://doi.org/10.4992/jjpsy.86.14012>

〔学会発表〕(計 1 件)

Uebuchi, H., Matsumura, T., Takahashi, M., Kawamura, Y., & Uebuchi, M. (2016). Do implicit avoidance of IWM modulate the self-prime effect on attachment lexicon processing? 17th Annual convention Society for Personality and Social Psychology Poster Abstracts, 37. San Diego: CA. 2016 年 1 月 28 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上淵 寿 (UEBUCHI, Hisashi)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号: 20292998